

艦これ 恋愛短編

MONO(暫定)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

練習もかねて、艦これ短編小説です

お題は基本的にTwitterのお題箱から拾つて、恋愛っぽいのを書きます

それゆえにクオリティは保証できませんが、あとがきやTwitterとかで愚痴つてると思います、

目

次

瑞鶴編

ZARA編

文月編

Bismarck編

18 15 6 1

鎮守府から電車で一駅。そこは港町、そして軍港が並ぶこの一帯の物流を担う、繁華街のような場所。そのシンボルともいえる噴水の前で、普段の白い士官服とは違った、フランクな服装の「提督」が立っている。本来ならばこの時間はここではなく、鎮守府の中心にある執務室へと出向し、膨大な書類仕事と向き合っている時間だ。しかし、今日は、その役は大淀に丸投げして、ようやく認められた休暇を謳歌すべくここにいるわけである。

が、特に歩き回るわけでもなく、周りを行く人々をぼんやりと眺めながら、絶え間なく吹き上がる噴水の水と、左手にまかれた腕時計の間で、視線を往復させている。

「やつほー、提督さん、待つた？」

声をかけたのは、一人の女性だった。少女といつてもいい。冬の街だというのに、ショートパンツというなかなかに攻めた服装。一応上半身にはコートを羽織っているが、その下はかなり薄着なようで、見ているだけでも寒さが増す。

上司と部下、指揮する側と指揮される側、とはいっても、艦娘はその名の通り、うら若き女性の姿をしているのだから、提督と艦娘の間に浮いた関係が結ばれるのはよくある話である。この二人も、休みを利用して一緒に街へ出てきたのだろうか、と道行く人たちは微笑まい（一部妬みのこもつた）視線で二人のそばを通り過ぎていく。

『待つた？』じやねよ、瑞鶴！』

しかし、そんな微笑ましい空気が、当の提督本人の絶叫によつて破壊された。

「お前、どれだけ俺がこの寒空の下待つてたと思つてんだ。一時間だぞ、正確には六十八分だ。午前十時つて言つたのお前だよな？ それを分かつて、なおも『待つた？』『いや全然待つてないよ』っていう定番のやり取りを求めるのかお前は!?」

振り向きざまに、満面の笑みを浮かべる艦娘、瑞鶴に対してもくし立てた。しかし当の瑞鶴の方は意にも介さない様子だ。

「分かつてないな、提督さん。女の子は準備に時間がかかるのよ」

「一時間の遅刻に対しても開き直るか、お前は」

「あ、とため息。いつものことだ。業務の方はともかく、私生活が基本的には、すばらんなこの艦娘が、時間通りにここに来るとは思っていない。」

「誘つたのはお前だから、もしかしたら時間通りに来るかも、なんて思った俺が馬鹿だったわ。へいへい、不問にしてくよ。いつものことだし」

「やつたね」

全く反省の色がない。これでも艦娘としては鎮守府のエースともいえる存在である。特に装甲空母となる改二が実装されてからはその防御力と速力を持つて、勝利に貢献し続けている。基本的に練度の高い空母の中でも特に高練度を擁する艦の一人である。

「で、なんだつけか、今日は」

「赤城さんの進水日記念のお祝い。そのプレゼントを提督さんと一緒に買ってきてほしい、って加賀さんに頼まれたの。提督さんのお休みとあつてるのが私だつたから」

「それで容赦なく俺の休みをつぶしたんだな……」

「いいじやない、こんな可愛い子と繁華街デートだよ？ 休みをつぶす価値はあると思うな」

わざとらしくクルッと回つて見せる瑞鶴。長い髪が、フワツと広がつた。

「あー、ハイハイ……つてお前その髪どうしたんだ」

「あ、やつと気が付いた。提督さん、そんなことだから彼女できなんだよ」

ニヤニヤしながら、瑞鶴が上目づかいに提督の顔を下から覗き込む。

普段は長い髪をツインテールにしている瑞鶴だが、今日は、それこそ回れば広がるように、一切止めずに背中の方に垂らしている。

「……なんか、翔鶴みてえだな」

「そこで他の娘の名前出すのってどうなんだろ……まあ、そうね。」

……翔鶴姉が行けるんだから、私だって行けるでしょう、って思つて。

どう？ 似合つてる？」

「あ、ああ、そうだな」

「なーに？ 似合つてないの？」

「いや、何というか、にあつてはいるんだがな、その、イメージがな」「イメージ？」

「ほら、お前、前にも一回髪下ろしてただろ？ レイテ作戦の時に」

レイテ作戦は、直近で行われた作戦の中では最も大規模といえるもので、艦娘「瑞鶴」としては、思い入れのある作戦でもあつた。鎮守府で一番気合が入つていたといつてもいい。その時の瑞鶴は髪を下ろし、陣羽織を来た姿で、提督に敵のボスへの突入に参加させると迫つたのである。

「なんか、そんときのイメージで、どうにも、な。可愛いという感じじゃないんだよな」

「……えつ」

「あれは、なんていうか、カッコいいって感じだつたからな」

「あく、あの時はちよつと……」

「だからなんか、髪下ろしてると決戦に臨む武士のイメージが取れなくてな……どうした、瑞鶴」

「……そんなことないもん。ちゃんと翔鶴姉にやつてもらつた、ちゃんととしたおしゃれなんだもん」

拗ねてしまつた。ぷいつと横を向いて、むくれた、テンプレートのような拗ね方。艦娘に成長という概念はないが、姉の翔鶴と比べても、瑞鶴の精神年齢は低い。

「……おう、なんかすまん……行くか、そろそろ」

しかし、提督にそう言われると、不満げな顔をしながらも、ちゃんとついていく瑞鶴。この程度のことは鎮守府では割と日常茶飯事。本当に気分を害したのなら、相手が提督であれ、このじやじや馬は艦載機をぶつ放してくる。

(やれやれ。翔鶴、とまでは言わんから、せめて大鳳くらい大人になつてくれれば、秘書官に据えるんだがな)

※※※※

夕方。空母寮のリビングで、翔鶴は帰ってきた妹を迎えた。

「おかえりなさい、翔鶴。赤城さんへの贈り物は買ったの？」

「……買った」

「そう。もう加賀さんに渡した？」

「……渡してきた」

「そう……あれ、今日は髪下ろしてたの？ 可愛いじゃない」

「ちょっと……翔鶴姉……」

急に顔を上げてバタバタし始める瑞鶴。その顔は真っ赤だった。
「どうしたの瑞鶴。顔が真っ赤よ、風邪？」

「……そうかも」

瑞鶴は言葉も短く、部屋の方へ踵を向けた。

普段なら翔鶴の隣に座つて、姉妹の団欒に花を咲かせるところである。それどころか、翔鶴と目を合わせようともしない。

「？ 何かあつたのかしら。提督と？ でも、せつかく加賀さんが気を使つてセットしてくれた機会だつたんだし……」

部屋に戻つて戸を開ける。部屋の内装は至つてシンプルで、最低限のものの置き場と机、そして翔鶴と共有している二段ベッド。

荷物を放り出して、二人で一枚の姿見の前で直立不動の真顔を作つて見せる。しかし、真っ赤な顔だけは隠しようがない。ちょっとほつぺたを引つ張つてみたり、はたいてみたりするが、一向に効果はない。あきらめた。

瑞鶴は二段ベットの上の段に、一足飛びで飛び込む。

そして、枕に顔を押し付けると

「あああああああああああ」

爆発した。

枕に顔突つ込んだまま、バタバタと悶える。ベッドがきしむ音が部屋に響くが、気にしない。

（あああああ、無理無理無理無理、提督さんの前じや頑張つてたけどこんなのは無理だよ、大体なんで髪下ろしててのに全然気付かないのに、気付いた途端にレイテの時の話とか、心臓止まるかと思つたじやな

い、何、何、私が勝負所で髪下ろすの知つてたの、いや、いや、絶対
そんなことない、翔鶴姉にだつて言つてないのに、てか私も私よ、翔
鶴姉にやつてもらつたつて何、翔鶴姉が聞いたら一発でばれちゃう
じやない、今からでも口裏合わせてもらう、でも翔鶴姉だつて理由を
聞くだろうし、あーなんであんなことしたんだろう、遅刻してまで慣
れないことしていつたのに、結局何も進まなかつたじやない、気合入
れていつた私がばかみたいじやない……）

瑞鶴の大暴れは、部屋の異音を聞きつけた翔鶴が踏み込んでくるま
で続いた。

ZARA編

「提督、お仕事終わりましたかあ？」

日が沈んだ後の鎮守府の執務室。執務机に向かう俺のところに、このところ毎日このイタリア生まれの重巡がやってくる。

「終わつたんなら飲みに行きませんか、いいワインが入つたんですけど」

「……生憎この職場には定時というものがなくてな。演習艦隊がまだ戻つてねえんだ」

「ええ、いいじゃないですか。隼鷹さんや千歳さんも待つてますよ」

提督の渋面などお構いなしに、椅子の後ろから寄つかかるボーラ。吐く息はすでにアルコールの匂いがブンブンしており、顔は上気して赤くなっている。

「飲みに行こうと言いつつ、しつかり出来上がってやがる……まあいつものことだが。ほら、やめろって。演習艦隊の報告を聞くまではこの部屋でいなきやならねえんだよ」

「ええ、いいじゃないですか。ザラ姉さまには私が言つておきますから」

今日の演習は、最近この鎮守府にも増えてきたイタリア出身の艦娘での演習である。割と古参で、練度も高いポーラはそこから外れていのだが、こんなことなら艦隊にぶち込んでやればよかつた。

「そんな簡単な問題じやねえ。それに酔つ払いにそんな大事なこと任せられるか」

「ねえ、提督、飲みましょうつて」

「だめだ、聞いやいねえ。」

俺はガクツと肩を落とした。そもそもこいつはなんでこんな酔っぱらつた状態で日常生活が送れるのか。それどころか、艦娘としての勤務についても、支障が出たという話はほとんど聞いたことがない。練度も高いし、演習や出撃の成績はかなり良いほうである。

そんなことを考えながら、背後から吹きかけられる酒の匂いに俺は

顔をしかめる。

しかし、直後、そんな執務室に救世主が現れた。

「提督、入ります」

戸がノックされて、外から声がかかった。俺の肩で、ぐでぐとなつていたポーラの体が硬直した。

「……いいタイミングだ。入り給え」

「失礼します。演習艦隊の帰投を報告しに来ました」

そもそもこの酔いどれを制御できる艦娘は、この鎮守府でもほんの数隻しかいない。そして、その最も最有力候補というのは、今日、演習艦隊の旗艦を任せていた、鎮守府最古参のイタリア艦、重巡ザラ。この酔いどれの姉である。

入口に立つザラと目が合つたポーラが、俺の肩の上で硬直して、そこから震えだす。

「ザラ、報告は後でいいぞ。こいつを鳳翔さんどこにいる隼鷹たちの卓へ放り込んでくれ」

「……了解しました」

「おお、頼もしい。」

「あれほど提督の邪魔をしないように言つておいたのに。あなたつて子は！」

「待つて、姉さま、これは、違うの、私は提督の日ごろの労をねぎらおうと思つて……」

「それがダメだつて言つてるのよ！ ほら来なさい！ うわっ、酒臭つ、あなたもう飲んでるの？」

ポーラが問答無用で俺から引っぺがされる。そのまま襟首をつかまれると、観念したのか、子猫のようにおとなしく連行されていった。

※※※※

「いや、助かつたよ、ザラ」

「お見苦しいところをお見せしました……」

「いやいや、もういつものことだしな」

ザラは慣れた手つきでポーラを隼鷹たちに引き渡した後、改めて執務室に戻ってきた。もちろん、そこで演習の報告を済ませてもらう。

「提督も甘やかさないでください。大体勤務中の提督の下に酩酊で来るなんて」

「ははは、あいつは酔つてるとこしか見たことねえな」

そうやつて話しながら、ザラは応接用のソファーに座つて、クリップボードにペンを走らせる。いつも酔つた状態で、会話が成立してい るかどうかすら怪しいポーラの姉とは思えないしつかり者。数が増えてきたイタリア艦のまとめ役として抜擢してからだいぶたつがその役も見事にこなしている。

その真剣な横顔は、本人の整つた顔立ちと合わせって、絵画の中の美女のような様相を醸し出す。

「……何ですか、提督」

しまつた。じつと見つめすぎていたのか、視線に気づいたザラが、 ペンを止めてこちらを向いた。

「あ、いや……そういうえば、ザラの練度も、ずいぶんと上がってきたなー、と」

「そうですね。イタリアの子も増えてきて、演習の旗艦をやることも 増えてきますから」

「……今いくつだ」

「ええつと、今日の演習で上がりましたし、97です」

その回答に、俺は少しだけ声を落とす。

「そうか……あと少しだな」

「え、なんですか」

「いーや、なんでもない」

そういうながら、俺は彼女から死角になつて、机の引き出しを そつと引いた。

そこに入つているのは、黒いビロードで仕上げられた小箱。最近上層部の方から送られてきた、『指輪』である。

高い練度と、提督との信頼関係を持つて、艦娘の戦闘能力をさらに 向上させるアイテム、と聞いている。が、大半の提督はそうは思つてい ない。これを艦娘に渡すということは、最も信頼している、といふことの証。形状が指輪であることも含めて、プロポーズとなぞらえて

「ケツコンカツコカリ」なんてうそぶく者もいる。

あと2か、と心の中でつぶやくながら引き出しをそつと閉じる。ザラはもう書類に目を戻している。ザラにはまだ指輪の話はできない。だから、イタリア艦のまとめ役をお願いしつつ、演習での旗艦をやらせて、練度を上げてきた。もちろん、これまで何度も何度も言おうとしたことはあつた。しかしそれも直前で踏みとどまつてしまつたり、例の酔っ払いの邪魔が入つたりで、結局言えていないのだ。

俺は執務室を見渡した。補佐をやつてくれる大淀はもう上がったし、こんな夜更けにここに来る人間はいないだろう。そして部屋の中には俺とザラだけ……

「……なあ、ザラ」

意を決した俺の声に、ザラが振り向く。

「何ですか、提督」

夜だからか、手に負えない妹を見た後だからか、いつもより綺麗に見える。その微笑みに、俺の決意はもろくも揺らいだ。

「あ、いや……この後、時間はあるか。さつきポーラを無理やり追い出しちゃつただろ。だからこれ終わつたら鳳翔さんどこに行こうかと思つてな……一緒にどうだ?」

見事なチキンである。いや、何とか彼女自身も同じ席に誘えただけでも、上出来なのだろうか。そもそも指輪を渡そうという相手にこれでは先が思いやられるというものが。

「別にいいですよ。私もポーラがご迷惑をおかけしていいか見ておきたいですし」

「そ、そろか」

「それでは報告書を仕上げちゃいますね」

そういうとポーラはみたび書類に目を戻して、ペンを走らせ始めた。

※※※※

「てへとくく、ほらほら、飲み足りないんじやないの。ほらグラス出して」

死屍累々。そんな光景が俺の目の前には広がっていた。

「おい、そろそろやめといたほうがいいんじゃ……」

「えへ、いいじやない。おいしいんだからさ〜」

問答無用で、俺の目の前にワインボトルが差し出される。ここで拒否するとボトルごと口に突っ込まれそうな勢いである。というか、実際にそれの被害者が俺の脇でぶつ倒れている。

みなみとグラスに注がれるワイン。どう見ても酔っ払いの酩酊状態のくせに、酒を注ぐ手は微塵もぶれない。

「お、おう。ありがとう」

申し訳程度に口をつけて、俺はグラスを置いた。

そして、あえて正面に座つてここにこと自分のグラスにワインを注ぐザラと目を合わせないように、横に倒れているポーラを起した。申し訳ないが、ここは生贊として蘇生してもらうしかない。

「……おい、ポーラ。お前の姉は酒を飲むといつもこうなのか」

「いつもですよ。ザラ姉様もワインは大好きですし……」

後のセリフが続かない。あのポーラが、常時酩酊といつても過言ではないポーラが、完全にいつてしまっている。ついでに、先ほどまでザラからのワインを物珍しそうに飲んでいた隼鷹と千歳は、早々に潰れてしまった。

「……この鎮守府の酒豪トップ3がこんなにもあつさりと……」

俺も、酒にはかなり強いほうだと思う。が、目の前のイタリア艦の姉さまは、次元が違った。

「さすがはポーラの姉、といつたところなのかな。……悪い意味で

「てへとく。ほらほら、ポーラとばつかり話してないで。呑んで呑んで〜」

いい笑顔。ここだけ切り取れば、好きな娘にお酌してもらっている

という男の夢みたいな構図なんだがな。

「それじゃあ、提督。姉さまをお願いします〜」

ポーラはそれだけ言うと、もう一度ぱたんと倒れてしまった。この

野郎、逃げやがった。

「まてまて、まださつきついでもらつたやつが残つてゐるし

「えへ、じやあ早く飲んでよ。待つてあげるから」

美人が、酒で上気した顔で、ここにこしながらボトルを差し出してくる。可愛い。とっても可愛い。最も、そんなものは幻想で、直後に手に持ったワインボトルから、直接アルコールを摂取し始めるのが。

「あれく、空っぽだ！」

いや、今お前が飲み干したんだよ。ボトルに半分くらい残つてた、イタリアから送られてきた割といいワインを。

「次の開けなきや～」

そういうつて、ザラは立ち上がり、座敷部屋の一角に置かれた木箱から、新たなボトルを取り出し始める。

「……持ち込みの本数、制限かけるかな。今度鳳翔さんに言つとこ」

両手でボトルを抱えて戻つてくるザラ。俺の目の前には先ほどから中身の減らないワイングラス。

「……そろそろ鳳翔さん呼ぼうかな」

すでに三人の被害者が出てる。千歳と隼鷹は、最悪、部屋にいるであろう姉妹艦を呼べば良いが、ザラとポーラ、両方が立てなくなると、俺一人で運ぶのは無理がある。酔っぱらつたレアなザラが見られなくなるのは残念だが、背は腹には代えられない。さつさと鳳翔さんにつまみ代を払つて撤収する口実を作つた方がいい。

「鳳しょ……」

俺は、趣味でこここの管理と営業をやつている鳳翔さんを呼ぼうと、外に顔を向けた

「どうしたんですかあく、てくとく～」

ところで、硬直した。いつの間にか、正面の席から離れたザラが、俺のすぐ隣に座つていた。

「ほらほら、お酒が減つてませんよ～。いらしないなら私が飲みます」

そういうと、ザラは、俺のグラスを手に取ると、一気に飲み干した。

「ほらく、持つて～」

空になつたグラスを俺に渡すザラ。

「お、おう」

大人しく受け取ると、今度は肩に手まわして、俺ごと引き寄せるようにしてワインを注ぎ始めた。

「うお、おい、ザラ……」

「ほら飲んで飲んで。私の故郷のお酒ですよ、不味いわけないですよ！」

そろそろ、ザラも言語が怪しくなつてきた。が、今の俺はそんなこと考えている余裕はない。

やばいやばい。心臓の鼓動が激しくなる。顔に血が上るのがわかる。酒のせいだけではない。というかついさつきまで標的となつていたのは他の艦娘たちで。俺はそこまで飲んでいない。待て待て待て、近い近い近い、本当に酔つたポーラみたいになつてんぞ。

「ザラ、放してくれ。飲むから、入れてくれた分はちゃんと飲むから」「やうだく、てくとく、放すとすぐ他の娘のどこ行つちやうじやないですか～」

「はあ？」

「さつきだつてちょっと目を離したらポーラの方に行つちやうし、初めの方は千歳さんとか隼鷹さんとばつかり話してるし、鳳翔さんとは仲良さそだし」

そりや提督やつてりや艦娘とは仲良くなるだろ、という言葉を飲み込んだ。

これはチャンスなんじやないか。今いるのは個室に近い座敷部屋で、一緒に飲んでいる三人は完全にダウンしている。つまり、今俺はこの部屋で、ザラと二人きり。

「な、なあザラ」

本当はこんな状態で言いたくはないが、今日の執務室でのやり取りを考えると、今後言う機会は、本当に指輪を渡すタイミングになつてしまふかもしね。

「あの、ちょっと話があるんだけどさ」

俺はザラの腕をかいくぐつて抜け出すと、姿勢を正す。

「あの、この間、艦隊強化の一環としての限界突破のシステムがうちの鎮守府にも導入されたのは知つてるだろ。それで、その限界突破なん

だけど……」

そこまで行つたとき、俺は右肩に重みを感じた。

気恥ずかしさから、無意識にザラから外していた視線をそちらへ戻すと、肩の上にザラの頭が乗つていて。

「……おい、ザラ、おーい」

スースーと安らかな寝息が聞こえる。ただ眠つているだけのようだ。

「……やれやれ」

※※※※

結局、そのあと、鳳翔さんによつて、寮の部屋から呼び出された飛鷹と千代田が、隼鷹と千歳を回収していつた。そして残るはイタリア艦姉妹なのだが駆逐艦ならいざ知らず、さすがに重巡クラスの娘を二人同時に運ぶのは無理がある。

そんなわけで、ザラとポーラの相部屋の鍵を持つてゐるのがザラだつたので、俺はひとまずポーラと座敷の片づけを鳳翔さんにお願いして、ザラをおぶつて、イタリア艦寮を目指してゐた。

「全く。大事なところで寝やがつて。俺の決意はどうしてくれんだけよ」

背中でだらしなく寝るザラ。居酒屋へ行く前、執務室にいた、デキる姉のザラはいつたいどこへ行つてしまつたのか。いや、ある意味で、ポーラの「姉」であることを再確認したわけだが。

「……それでも、お前に幻滅しなかつたことに、なんか安心したよ」俺はやっぱりザラのことが好きなようだ。しつかりものとか、酔つ払いとか、そんなところを全部ひつくるめてザラのことが好きだ。

「……んく、てくとく……」

「……起きたか、ザラ」

背中でもぞもぞと動く感覚。しかし返事はない。起きてはいないうだ。

全くのんきなもんだ。

「……てくとく、今日も勝ちましたよ。褒めてください」

「はいはい、すごいすごい」

寝ぼけたザラの声を背負つて、俺はイタリア艦の入つてゐる、海外
艦寮を目指した。

文月編

「作戦終了～、艦隊が帰投！」

「……おう、おかえり、文月」

書類から顔を上げた提督の顔には、クマが浮かんでいる。ここのこところ欧洲への派遣艦隊やそれに伴う遠征艦隊の強化で、提督の仕事が激増。寝る間を惜しんだデスクワークに追い込まれているのだ。

「司令官、大丈夫？」

「あ、ああ。まあ大丈夫だろう。……いや、不味いかも……」

提督が目頭を押さえる。

「文月、悪いが、コーヒーを入れてくれないか」「はい」

緊張感のない、ほわくんとした笑顔で文月が答える。いそいそと併設された給湯室へ入つて、そこに用意している自分のエプロンを付け始める。さながら新婚直後の新妻である。

「全く……欧洲派遣なんて毎年のようにやつてるじゃないか……」

そう愚痴をこぼしながら、立ち上がって伸びをする提督。執務机を離れ、執務室の中央に置かれた応接用のソファーアに腰を落ち着けた。給湯室ではやかんの沸騰する音に交じつて、文月の鼻歌が聞こえる。

「あ～、俺の癒しは文月だけってか……」

提督の指に光る指輪。給湯室の文月の指にも、同じものが輝いている。そう、なにを隠そうこの提督の、「ケツコンカツコカリ」の相手は、給湯室の文月である。

「いや～、周囲に口リコンと罵られながらも強行したかいがあつたと
いうか……」

まあ、事情を知らないものが見ればまごうことなき口リコンなのだが、艦娘はその存在の関係上、年齢の概念がない。法律に引っかかるないのはいいことに、「愛さえあれば、そんなものは関係ない！」と駆逐艦との「ケツコンカツコカリ」を行う提督の話は後を絶たないが、彼もその一員である。

「司令官く。コーヒー、入ったよ」

ソーサーに乗ったコーヒーカップを、ちょっとたどたどしい手つきで持つてくる文月。

「ありがとう、文月く」

先ほどのやつれた表情はどことやら、満面の笑みで、コーヒーを受け取る提督。そしてそれに無垢の笑顔を返す文月。仲睦まじい……親子のような絵面だが、実際は「フウフカツコカリ」である点が重要である。

コーヒーを渡して、文月は提督の隣に座る。

「どうお？　おいしい？」

「うんうん、おいしいよ」

「そくお？　よかつたく」

あまあまである。コーヒーは無糖のブラックだが、あまあまである。

「司令官、お仕事大変？」

「あ、ああ。いろいろと重なつててな。ゆっくりと体を休める時間もないって感じだ」

「そくお。そしたら……」

無邪気な笑みで、文月が自分の太ももをポンポン、と叩いた。

「いま、ちょっと休んだ方がいいよ」

天使だ。天使がそこにいる。心なしか後光も見える。この世には

文月教なるものもあるらしいが、この笑顔なら、手を合わせてもいい。「いや、さすがにそれは……ちょっと恥ずかしいというか……」

提督のささやかな抵抗も、むなしく、文月は優しく提督の頭を持つと、自分の膝の上に置いた。

「大丈夫だよ。ここには私たちしかいないし」

膝の上まで降りてきた提督の頭を、よしよし、と文月の手が撫でる。

「司令官は、よく頑張ってるよ。それは文月が一番よく知ってるんだから」

「文月……」

ああ、なんてよくできた娘、いや、妻なんだ。

「文月」

「なあに？」 司令官

「ちょっと眠たいんだが、このまま寝てもいいか？」

「だめだよ。ちゃんとお布団に行かないと。風邪ひいちやうよ」

「ちょっとだけだからさ」

「ううん。まあ、ちょっとだけなら……」

「……もう。仕方ないな。ちょっとだけだよ？」

Bismarck編

「艦隊旗艦ビスマルク、帰投の報告に上がりました」

「うむ。ご苦労だつたな。ドイツ艦隊の調子はどうだ」

ビスマルクを先頭に入つてくるドイツ艦の面々。数は少ないが、重巡、駆逐艦、空母、潜水艦と艦種のそろつた、海外艦の中でも屈指の精銳部隊である。

「上々よ。グラーフやゆーとの連携もだいぶ形になつてきたわ」

誇らしげに胸を張るビスマルク。海外の艦も今となつては増えてきたが、ビスマルクは記念すべきその第一号である。最近は海外艦が増えってきたこともあつて、各国ごとの艦隊を編成することが多くなつた。

そして、その際に、ドイツ艦隊旗艦として抜擢されたのが、ビスマルクである。

規律に対し忠実で、品行方正。日本に来てから日の浅いものもいるドイツ艦隊を率いるには最適の艦である。

「グラーフも日本の艦載機に慣れてくれれば、こちらも戦術の幅が広がるからな」

「そうだな。残念ながら、母国の艦載機はどうにも扱いづらいからな。アカギから借りたゼロは発艦も楽だ」

「ゆーちゃんも、最近はごーやたちとも仲良くやつてるんだつて?」

「はい……でつちたちには優しくしてもらつてます」

「プリンツは……聞くまでもないか」

「えー、どういうことですかー」

「じゃあ、最近あつたことを言つてみろ」

「この間、ユウバリと見たアニメがすごくおもしろかつたです」

「ほらみろ」

「レーベとマックスはどうだ」

「大丈夫! 楽しいよ、このチンジユフ」

「……まあまあね」

ドイツ艦は割と昔からいるものも多く、日本艦と艦隊を組んでいた

時期もかなり長かった。今でこそ「ドイツ艦隊」を中心にして、あちらこちらの部隊への出向という形になつたものの、昔は寮も分かれていなかつた。そのためか、最近では海外艦と日本艦の間のかけ橋のような役割を担つてゐるのだ。

「ありがとうな、ビスマルク。お前のおかげで、次のイタリア艦の受け入れもうまくいきそうだ」

そして、この活動を主導しているのも、ドイツ艦のリーダー格であるビスマルク。俺としても、この役にドイツ艦を選んだのは、この真面目なビスマルクの下に、よくまとまるからである。

「ふふん、当然じやない。私がやつてるのよ」

誇らしげである。

ともあれ、酔っぱらつて暴走する某I国艦や、風紀的にかなり怪しい服装で鎮守府を闊歩する某A国艦と違つて、問題行動はなし、仕事には真面目、任務の達成率も極めて高い。鎮守府の主力艦隊の一つであることは間違いない。

「さて、じやあ、みんなお疲れ様。ビスマルクはこの後打ち合わせがあるから残つてくれ。後のものは解散で」

「〔了解〕

※※※※

「……私だけ残してどういうつもりかしら」

皆が出て行つた後の執務室。応接用のソファードに腰を下ろして、足を組むビスマルク。

「いや、この間、青葉からこのあたりでやつてた夏祭りの写真をもらつてな」

「な、何よ。夏祭りに行つちゃいけないなんてことはないでしょ」

まだその写真に何が写つてたかなんて言つてないぞー。一瞬で吐いてしまつた。こいつほんとに軍人か。

「……お前ほんとに嘘つけないのな」

ふうつ、と頬を膨らませるビスマルク。他のドイツ艦の前では決して見せない表情だろう。こうして二人つきりの時は、素直になつて素

を出してくるから可愛い。

「うるさいわね。で、私が夏祭りに言つてたら何か問題でもあるの？」

前言撤回。まったく素直じゃない。仕方ない、もう一步譲歩してやるか。

「いや、俺、その日、執務室にこもつて仕事詰めだつたからさ。夏祭りの話を聞きたいな、と思つ……」

「仕方ないわね！ 聞かせてあげるわ！」

さつき日本艦と仲良くしている話を他の艦娘に聞いたわけだが、プライドの高いビスマルクは、あの場で聞いても、決してこんなにいい笑顔で語り始めることはなかつただろう。

でも予想通りというか、本人は語りたくて仕方なかつたようだ。「あの日はね、ナガトとムツと一緒に、ユカタを着ていつたのよ。ヤタイもおいしかつたけど、やつぱり最高だつたのはハナビね。あの祭りの最後に打ちあがるやつ。それから……」

怒涛の勢いで、長門たちとの思い出を語り始めるビスマルク。他のドイツ艦と同じように、日本艦と他の国の船との橋渡しの役割に対しては、非常に熱心なのは知つているが、最近はそれを抜きにしても、長門型の二人をはじめとした日本艦と、打算なしで仲良くしているように見える。もともとイタリア艦とは仲がいいし、なんやかんや言いながらも、因縁のアーヴィング・ヤルをはじめとしたイギリス艦とも仲良くやつてている。

「他にはそうね、あのリングアメというのはもう一度食べてみたわね……」

誇らしげに、得意げに、夏の思い出を語る。その様子からは、先ほどの凜とした、ドイツ艦隊旗艦の様子は見て取れない。年相応、もしかするとそれよりもよりも幼いかもしれない、無邪気なビスマルクがそこにはいた。

「……わかつたわかつた。お前はよく頑張つてくれているよ。本当にありがとう」

何気ない、素直な感想とお礼。俺はその言葉と共に、無意識に、ビスマルクの頭にポンツ、と手を置いた。

「ひやうつ」

ビスマルクの体が跳ねて、俺の手を払いのける。その勢いで、頭に乗つていた帽子が脇に落ちる。

「ああ、すまん。いやだつたか」

上目使いで、顔を真っ赤にしながら俺を睨むビスマルク。やれやれ、これで可愛いビスマルクは終わりのようだ。

怒鳴られるかと思つて、二三歩下がる。

ビスマルクは、落ちた帽子を拾い上げて、口元を隠したまま、真っ赤な顔でこちらを睨み続ける……と思ったが、急にそのとげとげしい雰囲気がふつと消えた。目元が緩んで、同じ上目遣いなのだが、ずいぶんと印象が変わった。

「……つたのよ」

「は？」

「誰が嫌つていつたのよ！」

「は、はあ？」

「ほら、わ、私が頭をなでさせてあげるつて言つてるのよ。も、もつと褒めてよ……」

さすがに、ビスマルクをあおつていた俺も、これは予想外だつた。帽子を握りしめ、頭を差し出すように顔を近づける。なんとか、先ほど可愛いビスマルクが、さらに練度を上げて戻ってきた。潤んだ目で俺の顔を見つめるビスマルク。はあつ、とため息が一つ漏れる。

「はいはい、よく頑張つたな、ビスマルク。頼りにしているぞ」

先ほどと同じように、頭にポンと手を置いて、軽く撫でてやる。こいつ、気持ちよさそうにしゃがつて。しかし、なんかあれだな。何かに似ていると思つたが、子供のころに飼つていた猫にそつくりだ。触ろうとすると邪険にするくせに、その後で撫でてくれとばかりにすり寄つてくる。

「ふふーん、もつと私に頼つてもいいのよ？」

「はいはい。頼りにしてるぞ。ドイツ艦隊旗艦様」

どつかの背伸び駆逐艦のようなセリフを宣うドイツ最強の戦艦様

の頭を、俺はしばらく撫で続ける羽目となつた。

※※※※

「なるほど、あれが、オイゲンの言うところの『ツン・デーレ』というやつなのか」

「なんかあそこまで行くと、「ツン」がどつか行つちやつてますけどね。『デレ・デーレ』です。まあ、どちらにしても、ビスマルクお姉さまの魅力を高める『ゾクセイ』であることには違ひはないです」

「どちらにしろ、あんなビスマルクは見たことがないよ」

「ビスマルク、部屋のオスカーミたいです……」

「……ねえ、これ、わたしたちが見ててもいいの？」

「……そうだな。マックスの言う通りだ。見つからないうちに退散するか。ほら、行くぞ、オイゲン」
執務室の戸の隙間から、顔を放すと、グラーフはオイゲンの襟首を捕まえた。

「えへ、もうちょっと見ていたいです！」

「問答無用だ。行くぞ」

ひそひそと争う声が、提督の執務室の前から遠ざかつていった。